hollow ataraxia

八神大輝

彼女の黒髪を覚えている。
細い指を覚えている。
なめらかな白い肌を。熱い吐息を。
何もかも。
けれど。

hollow

昼休み、稲穂信は学校の廊下で、クラスメイトの少女が前から歩いてくることに気づいた。

彼はいつも誰に対してもするように、片手を軽く上げて挨拶しようとして――やめた。不自然に途中まで上がった右手の拳を一瞬強く握り、すぐまた力なく下ろす。

少女は、そんな彼の様子を不審に思うようでもない。そもそも彼女の少し不思議な色をした瞳には、信も、そしてほかの誰も映ってはいないようだ。

少女はいつもどおり、少しうつむいて、硬い表情のままで信の横を何も云わずに通り過ぎた。銀がかった薄茶色の髪が風でわずかにそよぎ、柑橘系の香りを残した。

信は振り返り、その後ろ姿を見つめる。

少女の名は、双海詩音。一月ほど前に、信のクラスにやってきた転入生だ。

誰もが目を奪われるその美貌と、物静かな態度で、たちまち彼女の人気は沸騰した。転入早々、図書委員に立候補したことも、新しい学校での生活に積極的にとけ込もうとする表れかと思われた。

……しかし、そんな周囲の勝手な期待と想像は、あっという間に打ち砕かれる。

その美貌にはおよそ表情というものがなく、物静かな態度は周囲を拒絶する壁に過ぎなかった。図書委員になったことも、単に読書が趣味であることと、自分だけの世界に閉じこもれる場所を手に入れるためだったのだ。

彼女が周りから敬遠されるようになるまで、時間はほとんどかからなかった。なまじ外見がよく、成績も悪くなかっただけに、反感を持つ人間も少なからずいた。

しかし、どんな風評も詩音の態度を変えることはない。今日もまた、その背から感じられるのは、はっきりとした「拒絶」のみだった。

そして、その背中がなぜか黒髪の後ろ姿とダブって見えて、信は我知らず深いため息をついた。

（俺は……真冬みたいに……強くない……）

（……なによ、それ）

かつて自分の弱さが漏らした、取り返しのつかない一言。

償いをしたい、その想いが間違っていたとは思わないが、自分がやったのはただ彼女を裏切り、傷つけたことだけだった。罰なんかじゃない。ただ彼女の優しさに溺れてしまうのを怖れ、逃げ出しただけだ。

当たり前のことだが、あの事件の後、彼女は変わってしまった。黒瞳はただ虚ろな闇をたたえるだけとなり、周りの何もかもを拒む無表情の鎧をかぶった。そんな彼女を、彼女が卒業するまでの数カ月、信は為す術もなく見つめることしかできなかった。

そして今も。詩音にあのときの彼女と同じ危うさを見出しながら、やはり何もできず、その背を見つめるだけだった。

（……当たり前だ。俺は双海の友達でもなんでもないし。俺に何かができるわけがない。そもそも――）

欺瞞だ、と口の中で吐き捨てて、信は体を翻して歩き出した。

三年間、ずっと抱えている後ろめたさを、彼女と似た雰囲気を持つ詩音を気遣うことでごまかそうとしている。そのことを十分自覚していたから、信はただ自己嫌悪を強めた。

結局、俺には何もできない。償いさえ果たしていない俺には、何も――。

予鈴の音が聞こえた。昼休みももうじき終わる。

「……ふけるか」
信と詩音は、クラスでは隣同士だ。教室に戻れば、また詩音と顔を合わせることになる。
今はどうしてもそのことに耐えられず、信は足を階段に向け、屋上をめざすことにした。

＊

ドアをそっと開けて屋上に出て、信は同様にできるだけ静かにドアを閉めた。音が響いて、誰かがまだ屋上にいると教師にばれてはまずい。
ところが、出入り口のブロックの陰から、男女の話し声が聞こえてきた。こんな時間なのに、どうやらまだ人がいたらしい。見つからないよう、信は慌てて反対の陰に隠れたのだが。
「もう戻らないとだね。ごめんよ、呼び出したりして」
「ううん、私のほうこそ、ごめんね。その、私――」
「いいから、気にしないで。謝られるほうが……ね」
「……うん、そうだね、ごめん……」
聞こえてきた内容が興味深かったのはもちろん、どちらの声も聞き覚えのあるものだったので、ついつい聞き耳を立ててしまった。
男のほうは西野。智也と同じく、信の悪友の一人だ。
そして、女のほうは――。
「それじゃ、音羽さん、俺、先に戻ってるから」
そう云って、西野は急ぎ足で屋上を出ていった。
残された少女は、ほうと軽くため息をつく。
音羽かおるだった。彼女もまた、つい最近信のクラスに転入してきた少女だ。詩音とは対照的に快活で誰とでも仲良く話をする彼女は、わずかな日数ですでに人気者の地位を獲得していた。
狙っている男が多いのも知っていたが、まさかあの西野が思いきったことをするもんだ、と信が密かに感心していると、
「――で、そこにいるの、誰？　盗み聞きなんて、趣味悪いんじゃないの？」
剣呑な調子で、かおるに声をかけられてしまった。西野は緊張のためか気づいていなかったようだが、かおるにはどうやらドアを開け閉めした音が聞こえていたらしい。
「悪い悪い。盗み聞きなんてつもりじゃなかったんだけど、タイミング悪かったみたい」
偶然、というのは本当なのだから、信は悪びれた様子もなく、おどけた態度で姿を出した。かおるがわずかに目を丸くする。
「あちゃ、稲穂クンかぁ。これはまずったな」
「うわ、ひっどいなあ。まずったってなに!?」
「だって、稲穂クンって、口軽いでしょ？」
「それは条件と相手次第だね」
「ふーん。じゃあ、私も稲穂クンは覗き趣味があるって云い触らしちゃおっかなー」
視線が激しくぶつかること、わずかに数秒。信は両手を合わせて、かおるに深々と頭を下げた。
「すみません、勘弁してください」
「わかればよろしい」
腰に手を当てて、かおるがおどけた仕草でそんなことを云う。信はつい笑ってしまった。こういうところが、彼女の人気の理由なのだろう。
かおるもつられて微笑みを浮かべていたが、本鈴が聞こえてきたので慌ててドアノブをつかんだ。
「わ、大変。早く戻ろう、稲穂クン」
「あー……俺は、いいや。ゆっくりしてく」
「ゆっくりって……」
怪訝そうに振り向いたかおるは、ようやく信が屋上に来た意味に気づいて頷いた。呆れた様子で、軽く首を振る。
「なんでこんな時間になって屋上に来たのかと思ったら……

サボる気？」
「まあ、わかりやすく云えばそうなるかな」
「どんな云い方をしても、そうなるでしょ」
云いながらも、かおるもドアノブから手を離し、ドアに背を預けてため息をついた。信が不思議そうに首を傾げる。
「俺のことは気にしなくていいから。早く戻らないと、授業始まっちゃうよ」
「……」
「あ、まさかサボリを見過ごすことができないとか？　音羽さんって、そういうタイプじゃないと思ってたんだけど――」
「よし、決めた。私もサボっちゃおう」
「……はい？」
予想外の返事だった。かおるは確かに堅物には見えないが、不真面目というタイプでもない。自分から授業をサボるとは思えなかった。
そんな信の驚きにはお構いなしに、かおるは気持ちよさそうに伸びをすると、屋上に据え付けられているベンチに歩いていった。嬉しげに目を細めている。信は頭をかきながら近づき、彼女と並んでベンチに腰を下ろした。
「ほんとにいいのかい？　サボっちゃって」
「先にサボろうとした人が、何云ってるの」
「俺みたいなのはいいんだよ、でもさ……」
「なあに、それ。変なの。いいか悪いかで云えば、サボリなんて誰がやったって、みんな悪いことじゃない」
だから、悪いとわかってるなら仲間入りすることないじゃんか――そう云いかけて、信は苦笑して口をつぐんだ。これではまるで自分のほうが真面目な堅物みたいだし、それに何より。
「私、サボるのって初めて。なんかドキドキして、面白いね」
そんなことを話ながら屈託なく笑うかおるの笑顔がとても魅力的で、もっと見ていたくなってしまったのだ。
「学校から出ると、もっとドキドキだよ。スリル満点だね」
「それはさすがにちょっと気が引けるよ」
「買い物とかできて便利だよ？」
しばらくはそんな他愛のない話をしていた。
話をしている内、かおるは朗らかでよく喋るが、それ以上に聞き上手であることに信は気づいた。うまく相づちを打ち、自分の考えを適宜リアクションとして返してくれるので、話も広がりやすい。
そのせいだろうか。信はつい、こんな話題を口にしてしまった。
「音羽さんはさ、双海さんのこと、どう思う？」
「双海さん？　どうって？」
「なんつーか、同じ転校生として、どう見えるかって云うか……」
「うーん……」
腕を組んで、かおるは首を傾げた。慎重に言葉を選ぼうとするが、結局どう頑張っても、そもそも自分には双海詩音という人物を評する言葉がないことに気づいたようで、苦笑混じりに肩をすくめた。
「正直、よくわかんないかな。彼女、全然喋ってくれないし」
「……やっぱ、そうだよね」
「転校生同士、仲良くしたいって私も思ってるんだけどね。慣れない場所で、お互い助け合えることがあるんじゃないかって思ったんだけど……」
まったくの無駄に終わった様々な努力を思い出したのか、かおるは深い深いため息をついた。思わず信も一緒になってため息を漏らしてしまったが、ふと顔を上げてみると、かおるは一転、興味津々という熟語を顔に貼り付けて信を見つめていた。
「……な、なに？」
「ふふーん、そういうこと？」
「だ、だから、なにが」
「恋に悩むあまり、こうして授業にも出ず、秋の寒空を見上

げて、少年・稲穂信は嘆息するのでありました、と」
「……なんだそりゃ」
うまくノリを合わせることもできず、信は傍目にもはっきりとわかるほど苦笑してしまった。
確かに、そんな風に誤解されてもしょうがない切り出し方だっただろう。
――実際には、そんなことあり得ないのに。
「あれ、意外とこういうネタ、嫌いだった？　ごめんね」
信の表情が陰ったのにかおるも気づき、申し訳なさそうに謝ってきた。信は慌てて笑顔を浮かべて、首を振った。
「いや、別にそういうわけじゃないけど。でもさ、今、そんな話を振るのは、音羽さんにとってのほうが墓穴なんじゃないの？」
「え？　どうして？」
「さっき聞いちゃった話。やっぱあれでしょ？　西野に、告白されてたんだよね？」
「……」
む、と顔をしかめるかおる。信は重い話にならないよう、わざと軽薄に見えるようにへらへらと笑いながら言葉を続けた。
「ま、人のプライバシーに踏み込む気はないけどさ。西野も玉砕覚悟で特攻とは、意外と勇気ある奴だったんだなー」
「……どこから聞いてたのよ」
「いや、全然、最後だけだよ。でもやっぱ、音羽さんがふっちゃったんでしょ？　ぶっちゃけた話」
「……まあ、そうだけど」
視線をそらして、今度もかおるは深いため息をつく。そして、横目でじろっと信を睨んだ。
「西野クンからかったり、おもしろおかしく云い触らしたりしないでよ」
「信用ないなあ、俺。しないって」
「頼んだからね」

眉を寄せて念を押すかおるは、西野に対して本当に申し訳なく思っていることが信にも感じられた。その誠実さに感心する反面、野次馬根性も頭をもたげてきてしまっていた。それはこうして初めて二人きりで話をする機会に恵まれて、かおるに対して以前より興味が引かれていたからかもしれない。
「理由、聞いてもいい？」
「理由？」
「そ。ふっちゃった理由」
その言葉にはっきりと眉をひそめて、かおるは信をじっと見据えた。真意を見透かそうとするような、鋭い瞳の光。
「ちょっと趣味悪いんじゃない？　プライバシーに踏み込む気はないって云わなかった？」
「そう云われると返す言葉もない。ごめん、忘れて」
肩をすくめて、信は軽く流してこの話はもう終わりにしようとした。つい勢いで尋ねてしまったが、確かに悪趣味だし、理由を聞いたところでどうなるわけでもない。西野に対策をアドバイスするのも余計なお世話だろうし。
けれど、かおるはそっと目を伏せて、呟いた。
「……今は、そんな気になれないだけ」
「――え？」
なぜか。信の心臓が、とくんと一度、跳ねた。
「そんな理由にもならないことで断って、西野クンには本当、申し訳ないと思ってる。ほかに好きな人がいるとか、単純にタイプじゃないとか……そんなわかりやすい理由をあげられたらよかったんだけど」
「……」
「ただ本当に、今は恋をする気になれないの。臆病になってるのとは違うと思うんだけど……うん、今はまだ、想い出のほうが、私には――」
そこまで口にしたところで、かおるは唇を噛んで沈黙してしまった。

信もそれ以上、尋ねようとはしない。不用意に彼女の痛みに触れてしまったらしいという後悔と、それ以上に何か胸に迫るものがあり、信もまた言葉を失っていた。
気まずい時間は、しかし幸いなことに、あまり長く続かなかった。かおるがすぱっと表情を切り替えて、いたずらっぽい笑顔でうつむいていた信を覗き込んできたからだ。
「私がここまで云ったんだから、次は稲穂クンの番だからね」
「……え、俺の番って？」
「そ。稲穂クンって、こう云っちゃなんだけど、まあ、割と軽そうだし」
「……否定できないのがつらいところだな」
「こんな風に、話もしやすいしさ。それなりにもてるんじゃないの？」
「お、嬉しいこと云ってくれるねえ。やっぱわかる人にはわかる……」
「でも、見た感じ、さっぱり女っ気なさそうなんだよねえ」
「……」
鼻高々になったのも束の間、がっくりと信は肩を落とした。かおるは悪意もなくケラケラと笑ったあと、微笑んだまま首を傾げた。
「それが不思議。その気になれば、彼女だってすぐできそうなのに。もしかして、すっごい理想が高いとか？」
「いや、そういうんじゃなくて……」
曖昧に口ごもりながら、信はまた彼女のことを思い出してしまっていた。
理想が高い。そう云われればそうなのかもしれない。彼女の鮮烈さは三年経った今でも胸に焼き付き、色褪せることはない。しかし。
「うん……俺も、音羽さんと同じなんだと思う」
「同じ……って？」
「今は恋をする気になれないって奴さ」
「……」

かおるの表情が引き締まる。わずかに細めた眼でじっと見つめてくる視線を感じながら、信は薄く微笑んで、空を見上げた。
「そう……誰かを好きになるなんて、そんなの……」
さっきのかおると同じように、そこまでで口を閉ざしてしまう。
今度は信も軽薄に笑い飛ばすこともできず、再び沈黙が訪れた。
その沈黙を破ったのは、今回もやはりかおるのほうからだったが、その声の調子はさっきとは打って変わって、重くためらいがちなものだった。
「ねえ、稲穂クン……」
「ん？」
信は明るい笑顔を作って、かおるに向き直る。けれど、かおるはやはり真剣な表情のままで、言葉を探していた。
「こんなこと、云っていいのかどうか、わからないんだけど……」
「……？」
「私には――ちょっと、違って見えるよ」
「違うって……？」
聞き返す声がわずかにうわずっていることに、信自身も気づいていた。思わず握りしめた拳に、汗がにじんでくる。肌寒いほどの秋風が吹いているのに、体の内から熱がこみ上げてくるようだった。
かおるはためらいを繰り返した挙げ句、顔を上げて、信の眼をまっすぐに見つめて、云った。
「私には、稲穂クンは『恋をする気がない』んじゃなくて、『恋をしちゃいけない』って自分に云い聞かせてるみたいに見える」
「――」
信の眼が大きく見開かれる。そうして、つい絶句してしまった自分も、真剣すぎる表情のかおるも、この状況そのもの

を軽く笑い飛ばそうとして。
「……はっ……」
苦笑ともため息ともつかない息を漏らすだけに終わってしまった。
信はかおるから目をそらして、地に視線を落とした。
こんな簡単に見透かされるなんて、情けないったらない。自嘲気味の笑みが、口元を歪めた。
かおるもまた気まずげに目を伏せて、呟いた。
「……ごめん、変なこと云って」
「いや、いいよ。たぶん当たってるし」
「……」
「……俺は、空っぽなんだよ」
「……え？」
かおるが振り向いても、信は顔を上げない。組んだ手に顎を乗せて、空をじっと見つめる暗い瞳の色は、かおるが知るはずがなかったが、あの雨の日と同じものだった。
「俺には、何もない。何もできない。……だから、恋なんてできない」
「稲穂クン……」
かおるは眉をひそめて、しばし信の横顔を見守った。しかし、信がもうそれ以上話す気がないとわかると、大きくため息をついて頭を振った。
「……あんまり好きじゃないな、そういう自虐的なのって」
「ははっ、ごめんごめん、ヘタレてるよなあ、俺ってほんとに」
信はすぐにいつも調子を取り戻して、軽薄そうに笑う。かおるが下手に同情を見せて慰めてきたり、それ以上踏み込んで事情を聞こうとしてきたりしないことに内心、感謝しつつ。
そのとき、五時限目の終了を知らせる鐘が聞こえてきた。
「お、やっとひとつ終わったか」
「……って、稲穂クン、午後は全部さぼる気なの？」
「今更戻ってもしょうがないだろー」
やれやれ、という様子でかおるは肩をすくめると、立ちあがった。
「私は戻るよ。まだまだ初心者だからね」
「うむ、精進したまえ」
「はいはい、ご指導よろしくお願いしますよ、先輩」
笑いながら手を振って、かおるはドアのほうへ歩いていった。
信はそれに背を向けたまま、軽く手を挙げて答える。
かおるはそのままドアを開けて屋上を出ようとしたところで動きを止め、またドアを閉めて振り返った。
「ねえ、稲穂クン」
「ん？　サボリ第二講習に入る気になった？」
「じゃなくて」
苦笑するかおる。そして。
「さっきは違うって云ったけど、私たち、やっぱり似てるのかも」
「――え？」
信が振り向いたとき、かおるはもう笑っていた。だから、刹那、見せた彼女のあまりに真剣な眼差しに、信は気づくことができなかった。
「結局、理由を探してるだけで。臆病なだけなのかもしれないなって」
「……」
「そんなの吹き飛ばしてくれるような、映画みたいな出逢いがあるといいね、お互いに。それじゃ」
手を振って、今度こそかおるは屋上を出て行った。
信はしばらくその去った後をぼうっと見つめていたが、やがて大きくため息をつくと、ベンチに寝転がって空を見上げた。
秋の空は澄んでいて、とても高い。
「理由を探してるだけ……か」
その通りかもしれない。
許されない理由。償わなければいけない理由。……愛されてはいけない理由。

ずっとそんなものばかり探していた。大切な人を傷つけてまで。

「だけど――それでも、俺は」

両手を挙げて、顔を覆う。

こんなにも空は蒼く澄んで晴れ渡っているのに。

雨はまだ降り続いている。俺にも、あいつにも、彼女の心にも、きっと。

＊

放課後になって、信はようやく屋上を後にした。鞄を取りに行くため、教室へ足を運んだところ、人の話し声が聞こえた。どうやら智也のようだ。

なんとなく今は顔を合わせづらい気がする、もう今日はこのまま帰っちまおうか、と考えつつ信が入り口の隙間から教室を覗くと、驚いたことに智也の話し相手は詩音だった。談笑、とはさすがにいかないが、それでもいつもよりずっと表情があって、少し微笑んでさえいるようだった。

（……へえ、あんな顔するんだ）

ますます入りづらくなって、結局、信はそのまま踵を返した。

何かに追い立てられるように、――何かから必死に逃れようとするように、足早に校舎を出て行く。

これまで頑なに思い詰めていたものが動き、何か新しい想いが生まれようとしていた。けれど、信がそのことに気づくには、まだそのときは早すぎた。

ataraxia

クラスメイトの少女が、笑っていた。
名を、今坂唯笑という。
その名に込められた願いのまま、満面の笑顔で。それは少し前まで見られた、無理に浮かび上げた笑みではなく、本当に心からの笑顔だとわかった。まるで真夏のひまわりのようだ。
その笑顔の先には、三上智也がいる。智也もまた、唯笑をからかいながらも、その目をまっすぐ見つめていた。もう誰かを捜すように視線をさまよわせることも、唯笑と誰かを重ねて見ることを怖れて目をそらすこともない。
そんな二人の様子を見つめて、信はなぜか、小さなため息をこぼした。
これ以上ないくらい、うまくいった結果だった。まさに自分が望んだ通りの姿ではないか。――いや。
「……稲穂さん」
低い、小さな呟きに我に返り、振り返る。隣の席の美しい少女が、ほんの少し眉をひそめて、その少し不思議な色の瞳で信を見つめていた。
わかってる、というように、信はわずかに顎を引いて頷く。詩音は数瞬、目を伏せると、席を立って教室を出て行った。この昼休みもまた図書室に向かうのだろう。
信はその背を見つめながら、つい先日、この教室で彼女に云われた言葉を思い出していた。
（もしあなたが本当にそれを自分の罪だと思っているのなら、一生、自分の胸だけにしまって、それを背負って生きていくべきです。それがあなたにできる唯一の償いなのではないのですか）
――その通りだった。

智也と唯笑は、二人で過去を乗り越えた。信はそんな二人の背中をほんの少し押してやれたかもしれないが、だからといって、それでこれまで抱えていた想いがすべて晴れるはずもなかった。それどころか、むしろ無力感を募らせてさえいた。
――俺は、裁かれていない。
その重さに耐えられず、いっそ自ら智也にすべてを打ち明けようとして。
そして、それがまた逃避に過ぎなかったことを、思いがけず詩音から思い知らされた。
それなら、この三年はなんだったのだろう。すべてを捨てて、大切なひとをどうしようもないほど傷つけてまで選んだことは。
自分の中の虚ろな深淵が、さらに大きく口を開けて自分自身を飲み込もうとしているように、信は感じていた。
そして、同時に。
空っぽで何もないはずの自分の中に、あの放課後からほのかに灯る光があることも。
（私は、もう彼らに傷ついてほしくないだけです）
小さく微笑んで、彼女はそう云った。その悲しい優しさに、俺は――。
「だあああああああああっ!!」
「うわっ、ど、どうしたの、信くん？」
「なんだ、ついに完全にイっちまったか？」
突然奇声を発した信に、唯笑が驚いて目を瞠り、智也はあきれ果てた様子で肩をすくめる。信はそんな二人を威嚇するように歯をむき出して見せた。
「叫びたくもなるっつの。毎日毎日、人前でいちゃつきやがっ

て、このバカップルが！」
「えー、バカップルだって。どうしよう、智ちゃん」
信の叫びに、さすがに智也はばつが悪そうに頬をかいたが、唯笑はむしろ嬉しげに頬を染めていた。信はもはやがっくりと肩を落とすしかない。
そんな様子を見かねて、もう一人のクラスメイトが口を挟んできた。
「まあ、今度ばっかりは稲穂クンの云う通りかな。独り者には目の毒だよ、ほんと」
「ええー、音羽さんまでぇ。そんなことないよねー、智ちゃん」
「……ごめん、とりあえず謝っとけばいいか？」
「……もういいよ、行こ、稲穂クン」
「……だね。どうせ、こいつらはラブラブお弁当なんだから。俺らは淋しくパンでも買ってこよう」
「あ、信、購買行くんなら牛乳買ってきてくれ」
「なんで俺がお前のパシリやらなきゃならねえんだよ！」
醜く智也と罵り合いながら、信は教室を出た。かおるがため息と共に頭を振りながらその後に続き、唯笑は笑顔で「行ってらっしゃーい」と手を振っていた。

＊

「サンキュ」
「ん？」
不意に呟かれた信の言葉に、かおるは卵焼きを口に頬張ったまま、不思議そうに首を傾げた。
二人は屋上に来ていた。信は云ったとおり購買でパンを買い、かおるは弁当を持ってきた。
いつもは智也たちと四人で昼食を食べている。勢いで飛び出してきた信に自分がつきあってあげている、と信が考えたのだろうと解釈したかおるは、
「なんで？　立場は一緒じゃない」
屈託なく笑って、卵焼きを飲み込んだ。信は薄く笑って、軽く首を振る。
「じゃなくて」
「どういうこと？」
「なんとなく、フォローしてもらった気がした」
「……」
かおるは答えず、また小さく微笑んで肩をすくめた。
こうして屋上で食事をするには、もうだいぶ風が冷たくなっている。そろそろ別の避難場所も探しておかないと――と考えたところで、なぜか図書室が浮かんでしまって、信は大きく頭を振った。
「どうしたの？」
「……いや、何でもない」
「変なの」
やはり屈託なく、かおるは笑う。だが、食べ終えた弁当箱を片づけると、かおるは少し表情を硬くして、信に面を向けた。
「ねえ、稲穂クン」
「ん？　なに？」
「実はね、お願いしたいことがあったの。それで、二人で話せる機会を狙ってたんだ。だから、フォローしてもらった、なんて云われると困っちゃう」
「……それはそれ、だろ。お願いって何？」
変に堅いわけではないのだが、筋は通さずにはいられないかおるの生真面目さに、信は苦笑しつつ続きを促した。かおるもつられて、小さく微笑む。
「うん。……あのね、今日は稲穂クンに第二講習をお願いしたいと思って」
「第二講習……？　――って」
何のことかと一瞬考えたものの、信はすぐに思い出した。先日、この場所でかおるが初めて授業をサボるきっかけを作

ったのだ。もちろん信が勧めたわけではなく、むしろ止めたのだったが……。
「ええと、午後は授業に出る気がしないから、つきあえって
こと？」
「惜しい。弟子はもっと高みを目指しているのですよ、先生」
「高みって……え、まさか」
おどけてみせていたかおるが、表情を引き締める。そして
信をまっすぐに見つめて、頷いた。
「そう。学校を抜け出したいの」
「……」
軽く眉をひそめて、信はかおるの目を見つめ返した。かお
るもまた目をそらさず、唇を噛みしめる。そのあまりに真剣
な表情に、信は――。
「ぷっ……くははははっ」
つい、吹き出した。
「なっ……」
無論、かおるの機嫌は猛烈な勢いで斜めになる。呼吸も忘
れるほど真剣だったのに。
「なによ、もう、笑うとこじゃないでしょ!?」
「ごめんごめん。……いや、だってさ、サボって学校抜け出す
ぐらいのことで、そんな思い詰めた顔してるからさ」
「抜け出すぐらいって……普通は大事だよ」
確かに少し大袈裟だったかもしれない、と考えて、かおる
は頬を赤らめつつも憮然として口を尖らせた。信は笑いなが
ら――今日もまたことさら軽薄そうな表情を作りながら、
言葉を続けた。
「遊びに行きたいから、抜け出すの手伝ってって軽く云えば
いいのに。そんなんじゃ、深い事情がありますって自分で宣言
してるようなものだよ」
「……あ……」
かおるがはっと息を飲む。信はその様子を横目で窺い、薄
く笑ったままで腰を上げた。

「そんじゃ行こっか。昼休みの混雑に紛れたほうが出やすい
よ」
そう云って、屋上から出るドアまで歩いていく。かおるも
弁当箱を片づけて立ち上がったものの、すぐ後を追わず、う
つむいて立ち尽くしていた。信はそれに気づき、振り返って首
を傾げた。
「ん？　どうしたの？」
「……」
「もしかして、ビビってんの？　ほんと、たいしたことじゃな
いから――」
「……事情、聞かないの？」
信の軽口など耳に入らない様子で、かおるは硬い声で呟い
た。信は少し困惑気味に眉をひそめ、そしてまた、薄く笑っ
た。
「プライバシーには、踏み込まないよ」
「……」
かおるは顔を上げて、信の笑顔をじっと見つめた。そうし
て、しばしの沈黙の後、どこか淋しげにも見える笑みを浮かか
べた。
「稲穂クンは、優しいのか冷たいのか、よくわからないね」
「俺？　俺は――」
その言葉への答えを信は苦笑で誤魔化そうとしたのだが、
不意にまた黒髪の彼女のことを思い出してしまい、失敗し
た。憂いと自嘲を湛えて、呟く。
「……俺は、臆病なだけだよ」
ある意味、予想通りだった答えに、かおるは肩をすくめ
る。
「相変わらず自虐的なのね」
「ごめん、ヘタレで」
もう一度、二人は顔を見合わせて苦笑した。

＊

一時間後、信とかおるは藤川駅前の繁華街にいた。かおるは心細げに周りをきょろきょろと見回している。信はさりげなく、その耳元で囁いた。
「音羽さん、それじゃかえって怪しいって。堂々としてないと」
「う、うん、そうだね、ごめん」
「まあ、制服ってのがネックではあるけどね」
「補導員、とかいるよね……。ごめんね、稲穂クン、こんなとこまでつきあわせて」
本当に申し訳なさそうに、かおるが信に頭を下げる。だから、そんなに蒼白な顔してちゃ不審に思われるんだけどな、と内心苦笑しながら、信は朗らかに首を振った。
「気にするなって。どうせ暇だから。で、どこに行きたいの？」
「うん、ありがと。映画館なんだけど……」
「こりゃまた目立つところに」
「……ごめん」
「だーかーらー、もう謝るのナシ。ね？　せっかくなんだから、デート気分で歩こうぜ」
雰囲気を変えようと、信は勢いでそんなことまで云ってしまった。かおるが目を丸くしてじっと見つめてくる。
「……あ、ごめん、調子に乗りすぎた」
行こっか、とばつが悪そうに頬をかきながら、信は歩き出した。すると、かおるは小走りに信の横に並び、すっとその肘に腕を絡めてきた。
「……っ」
不意打ちに、信は思わず息を飲んで、かおるを振り返る。かおるはいたずらっぽく微笑んで見せていた。
「デート気分、なんでしょ？」
「う、うん」
「つきあってもらってるんだから、これぐらいはお礼しないとね」
「……お釣りが出るぐらいの役得だよ」

ようやくかおるらしい朗らかさを取り戻してくれたことに安堵し、信は笑い返して歩き出した。肩に掛かるかおるの髪の香りと、腕に触れる柔らかい感触に鼻の下を伸ばしていてはちっとも様にならなかったが。
そんな信にとっては残念なことに、映画館は少し歩くとすぐ到着してしまった。かおるが信から腕を放して、少し足早に歩いていく。信は名残惜しそうにその背を眺めつつ、声をかけた。
「映画が見たかったの？」
そういえばかおるは映画が好きだという話は聞いたことがある気がしたが、それにしてもわざわざ学校を抜け出してまで見に来るものだろうか。ファンにしてみれば「映画館で見ること」が重要なのだろうが、上映予定の映画を見たところ、今日この時間でなければ見られないものがあるわけではなさそうだった。
「ううん、そうじゃないの。……よかった、まだ出てきてないみたい」
辺りを見回して、かおるは安心したようにため息をついた。そして、信を促して、そばにあったベンチに座った。
「まだ出てきてないって……待ち合わせってこと？」
「うん、正確に云うと……待ち伏せ、かな」
「……それはまた不穏だね」
思いがけない言葉に、信が眉をひそめる。かおるは小さく笑って頷いた後、驚くほど真剣な表情を浮かべて言葉を続けた。
「知り合いがね、今やってる映画に関係してるの。この時間に挨拶に来てるはずなんだ」
「……ふーん……」
かおるが待ち伏せをしてまでその人物に会いたい理由はなんなのか。やはり信は自分から尋ねようとはしなかったが、かおるもまた信の言葉を待たず、話し続けた。
「知り合いっていうのは……つまりまあ、昔の恋人なんだけ

ど」
「……元カレ、ですか」
「うん」
頷いて、一度言葉を切ったかおるは、ためらいがちな視線を信に向けた。信もおどけてみせることはせず、ただ軽く首を傾げて続きを促した。
「話、聞いてもらってもいい？　相談とかじゃなくて、聞いてくれるだけでいいの」
「……ああ、いいよ」
信が頷くと、かおるはありがとう、と答えたものの、しばらくの間、言葉を探すように沈黙していた。
信はその横顔を、ついじっと見つめてしまう。別れた恋人に逢いに行くこと。それはこの三年間、信にはけしてできなかったことだ。そしてこれからも、二度とないと思っていた。逢ってはいけないのだ、と。
けれど、それは――。
「……はじめに連絡をくれたのはね、彼のほうからだった」
うつむいたままで漏らされた、かおるの小さな呟きに、信は思考を中断した。ただ黙って、その続きを待った。
「呼び出されて、会って……やり直したいって、云われたの」
「……」
「びっくりしたよ。正直……少し、嬉しかった。嫌いになって別れたわけじゃなかったし……。彼が映画の仕事を始めて、どんどん忙しくなっちゃって、すれ違いが多くなって、それで……。やり直せるものならって、私だって何度も考えた。それは本当。だけど……」
そう、やり直せるものなら。
何度考えただろう。信は我知らず、強く唇を噛む。
もしやり直すことができるなら、誰も傷つけない道を選べたかもしれない。しかし、起こった出来事は変えられない。傷を繕うことはできても、その痕を消すことはできない。
その傷痕を、ずっと「罪」と呼んできた。だから――。
「……やり直すことなんて、できない」
思わず、信は声に出して呟いていた。かおるがはっと驚いて顔を上げる。だが、すぐにまたうつむいて頷いた。
「うん……そうだね。もう、終わったことなんだから」
「……」
「もう一度始めよう、そう云ってほしかった」
「……え？」
己の中にある深淵にまたしても囚われ、深い闇に思考を埋没させていた信は、その思いがけない言葉に驚いて面を上げた。
そこには、きっぱりと空を見上げ、強い決意に表情を輝かせたかおるがいた。
信はかおるの心境にどこか似たものがあるように感じ、共感しているつもりになっていたが、それがただの自己憐憫に過ぎなかったのだと、今この瞬間、思い知らされていた。
「一度終わってしまっても、また新しく始められるよ。やり直すんじゃない。また最初から始めることは、きっとできる。私はそう信じてる」
「……」
「でも……彼と話してて、わかっちゃったんだ。彼が見てるのは、昔の私なの。幸せだった頃を、懐かしんでるだけ。それじゃ、何も始められないよ」
「……」
「そのことを、はっきり彼に伝えたかった。今日を逃すと、彼とはまたしばらく会えなくなるから。電話とかじゃなくて、ちゃんと会って伝えなくちゃいけないと思って」
「……」
「でも、先に連絡して、放課後に時間を取ってもらって……なんて段取りをつける勇気はさすがになくってさ。こうして勢いで飛び出して来ちゃった。あはは、ほんと、迷惑かけてごめんね、稲穂クン」
「……」

「……稲穂クン？　おーい、聞いてる～？」
「あ……ああ、いや、聞いてる、ごめん」
　ほとんど茫然自失、という状態だった信は、かおるの呼びかけでようやく我に返った。かおるは不思議そうにその姿を見つめていたが、やがて申し訳なさそうに頭を下げた。
「こっちこそごめん。こんな話、いきなりされても困っちゃうよね」
「い、いや、そうじゃない！　そうじゃなくて！」
「……？」
「いや、なんて云うか……その……俺ってヘタレだよなあ、やっぱ」
　そう云って、頭をかきながら信は笑った。その笑顔は信が時折見せる自嘲混じりの苦いものではなく、子供のように素直で――泣き出しそうにさえ、見えた。
「ど、どうしたの、稲穂クン？」
「いや、なんでもない、ごめん、忘れて、ホントに」
　信の様子はまったく支離滅裂だった。自分の話が信を混乱させたのだとかおるにもわかっていたが、どうやら謝るべき筋合いでもないようだと理解して、かおるは肩をすくめるだけですませた。
「変なの。……それと、自虐的なのはもうやめなよ、ほんとに」
「……はは、面目ない」
「私がこんな風に考えられるようになったのも、稲穂クンが話し相手になってくれたからだと思うし」
「そりゃ買いかぶりだよ」
「智也と今坂さんだって、稲穂クンがいなかったらどうなってたか」
「……」
　その名前を出されると、信の表情は再び陰ってしまう。かおるはその事情をどこまで知っているのか、ただ笑顔を浮かべていたが、映画館から出てくる人波にはっと顔をこわばらせた。信もそれに気づき、そちらに視線を向ける。かおるが探している人が誰なのかは、わかるはずもないが。
「……いたの？」
　かおるが黙って頷く。そして、拳を握りしめて、立ち上がった。
「行ってくる。今日はほんと、ありがと」
「……待ってよっか？」
「ううん。……泣いちゃうかもしれないからね、見られたくない」
「そっか。……健闘を祈る」
「任して」
　おどけた仕草で拳を交わし、かおるは歩き出した。そして、信も立ち上がって背を向けたとき。
「稲穂クン」
「――ん？」
「私も、健闘を祈ってるよ」
「……おう」
　なんのこと、とは訊けなかった。ヘタレてばかりはいられない。
　かおるが自分に発破をかけるためにわざとさっきのような話をしたのだとは、信は考えていなかった。かおる自身も、誰かに話をすることで気持ちを整理したかったのだろう。
　その「誰か」に信が選ばれたのは、やはりかおるも信に対して、どこか共感を持っていたから。そして、自分が乗り越えられると信じたものを、同じように信じてほしいと想ったから。
　だったら、たまには見栄を張らないと。
　信の足は、わざわざ抜け出した学校へ向かっていた。

＊

放課後の喧噪に紛れて、信は何食わぬ顔で校内に戻った。

まっすぐ図書室に向かい、ドアを開けると、校舎内外のざわめきとは無縁の静けさが広がっている。今日も人影はほとんどない。

信はためらいがちにゆっくりと、貸し出しカウンターのほうに歩いていく。そこにはいつも通り、銀がかった薄茶色の髪に、少し不思議な色の瞳をした美しい少女が座っている。

それもいつも通り、熱心に本を読んでいた少女――詩音は、信が正面に立ったのに気づいて顔を上げた。向かい合った信の笑顔は、いつになくぎこちない。それでも詩音の表情は揺らぐことなく、硬い声を紡ぎ出した。

「こんにちは」

「……こ、こんちは」

「お帰りなさい、というべきでしょうか」

「……は？」

「午後、いらっしゃいませんでしたよね？」

「……ばれてたんだ」

「いくら私でも、隣の席が空いていれば気がつきます」

そこまで――彼女にしては珍しく長く――話したところで、詩音は視線を本の上に戻した。次の会話の糸口を信がどうにか探し出そうとしていると、意外なことに、詩音のほうがぽつりと漏らした。

「……音羽さんもいらっしゃらなかったようですが」

「そ、そうなの？　どこ行ってたんだろうね」

とっさにとぼけたのは、本能の為せる技か。

詩音は一瞬、不審そうな目をちらりと信に向けたが、すぐにまた面を伏せてしまった。

「お友達に心配をかけるのは、あまり感心しません」

「心配……？　友達って？」

「昼の騒ぎの後で姿をくらましては、喧嘩が原因で気分を損ねたようではありませんか。今坂さんも智……三上さんも気にしていましたよ」

「ああ……そっか」

「……もっとも、あのお二人の態度にも問題はあると思いますけど」

「……え？」

思いがけない台詞に信は詩音の表情を覗き込もうとしたが、詩音は頑ななまでに面を伏せている。本を読んでいるにしてはさっきからページをめくっていないし、そもそも詩音のほうからこれだけ話をしてくれること自体が珍しい。

ここにいたってようやく、信は詩音が自分を気遣ってくれているらしい、と気がついた。思わず顔がほころんでしまうのを止めようがない。ついつい声も大きくなった。

「だよね！　詩音ちゃんもやっぱそう思うでしょ!?」

「……！」

「あいつらはまったく、人前で平気でべたべたしやがって……って、あれ？」

突然、詩音が弾かれたように顔を上げていた。驚きに目を丸くし、頬が赤く染まっている。

「ごめん、声大きかった？」

「そ、それもありますけど……」

「ん？　どうしたの、詩音ちゃん？」

「その……私は男の方に、そのように呼ばれるのは、ちょっと……」

「え？　……あ、ああ、ごめん、つい……」

気づかないうちに名前で呼んでしまっていたことを自覚して、信も顔を赤くした。

――『詩音』

聞こえないよう、口の中だけでもう一度その名を呟いてみる。

綺麗な名前だと思った。口にするだけで、気持ちが浮き立つような気がする。

そして、同時に。思い出してもいた。

（『真冬』なんて、寒そうな名前でしょ？）

（俺は……『真冬』って名前、好きだな）

その記憶は未だ鋭い痛みをもたらす。けれど、ただ苦いだけではない。後悔だけが、彼女のくれたものではないはず。すべてを「罪」という大義名分にすり替えて、何も見ないよう、考えないようにしてきた。苦しんでいる振りをしてきただけだ。今ならそれがわかる。そんなのは、きっと――。

（幸せだった頃を、懐かしんでるだけ。それじゃ、何も始められないよ）

そして、今ここにある想いは。

「稲穂さん……？　どうかしましたか？」

「いや……やっぱいい名前だよ、詩音ちゃん」

「だから……っ」

頬をさらに赤くして、詩音が睨んでくる。銀の髪が揺れ、金の瞳が瞬く。

どこか似ているから、気になったのかもしれない。

やり直したいから、面影を探していたのかもしれない。

けれど、詩音は詩音だ。今、惹かれてやまないのは、今、ここにいる詩音なのだ。

そう認めてしまうことが許されるのかどうか、今はまだわからない。

それでも、今、この場所から新しく始められるのだと、強く信じたい。

信は祈るような想いで、詩音の顔を見つめ続けた。

「――稲穂さん？　人の話を聞いていますか!?」

Memories Off EX
Scenario for
Shin Inaho
"hollow ataraxia"
end

あとがき

「ataraxia」ってのは哲学用語で、「乱されない心の状態」を指すそうです。幸福の必須条件だとか。

今さら説明するまでもないと思いますが、このタイトルはゲーム「Fate / hollow ataraxia」からいただいております。

恥ずかしながら、私は「hollow ataraxia」って意味が最初わからなかったんで、辞書引きました。そのとき、なぜか「俺は空っぽなんだよ」という信の台詞が浮かびまして、そこから「自分を空っぽだと自覚しながら無力感にさいなまれていた信が、詩音への想いを認めることで自分自身も空っぽの淵から抜け出すことができる」……という本作のテーマが生まれたわけです。

もっとも、信のこの時点での境地は「ataraxia」からはほど遠くて、真冬本人に再会しただけでパニック起こして失踪しちゃう程度のものだったということは、シリーズを読んでくださっている方にはすでにおわかりのことだと思いますが（笑）。それでも信が自分の気持ちに一区切りつけるところを書けて、自分としてはよかったと思っています。

真冬はずっと信を想っていて、信に囚われていたんだけど、じゃあ信のほうはどうだったのよ？というのは、一度ちゃんと書かないといけないんじゃないかと気にかかっていたので。詩音のことを好きだと自覚するまで、真冬のことをどう考えていたのか、詩音を好きになっている自分をどう整理して受け入れたのか、とかいうことを書きたかったのでした。

あと、かおるが信に惚れてるような描写はしないよう心がけてたんですが、大丈夫だったでしょうか（汗）。信とかおるは「共犯者」というか、普段はどっちも表に出さないダークサイドが共感し合ってるイメージで書きました。

ご感想などいただけると、幸いです。

八神大輔

初出

hollow　二〇〇五年十二月七日

ataraxia　二〇〇六年四月一七日